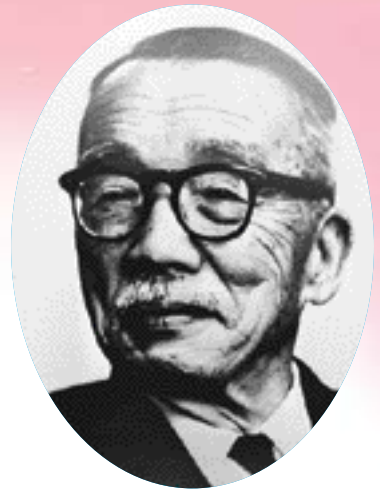


「日本と中国の交流を実現したい」 日中国交回復に尽くした政治家

まつむら けんぞう
松村 謙三



アジアの平和をめざして

中国は、広い国土と豊富な資源をもつ大きな国だ。アジアの平和のために、日本と中国はお互いの立場を認め合って、協力しなければならぬ。

そう考えた松村謙三さんは、日本と中国の関係を良くするために、中国を訪問しました。太平洋戦争が終わってから14年後、謙三さんが76歳のときです。「日中の国交回復は、われわれ両国の子孫のためにも、実現しなければなりません。ぜひ、友好的な関係を築きましょう」

謙三さんは、心を込めて中国人の人々に訴え続けました。しかし、中国側の反応は、とても厳しいものでした。

「日本は、中国を敵だと考えている！」

「日本はアメリカと一緒に、中国を侵略するつもりではないか」



日本と中国、二つの国の子孫のために
両国のつながりを、広げていかなければ！
そして、ぜひとも国交の回復を
実現しなければならぬ。
どうか、私を信じてほしい。

それは、謙三さんが、日中友好のかけ橋だったからです。

中国の代表が「ぜひ訪れたい」と熱心に希望したのは、どうしてかな？

2002年、日中国交回復30周年の年に、李鵬さん（中国全人代常務委員長）が、福光町の松村記念会館を訪れました。



松村謙三さんのミニ年表		
西暦	年齢	
1883年		西砺波郡福光町に生まれる
1906年	23歳	早稲田大学を卒業し、報知新聞社に入社する
1912年	29歳	新聞社をやめ、福光町に帰る
1917年	34歳	福光町議会議員になる
1919年	36歳	富山県議会議員になる
1928年	45歳	衆議院議員になる
1959年	76歳	中国を訪問し、周首相と会談する
1970年	87歳	5回目の中国訪問
1971年	88歳	亡くなる
1972年		(日中国交回復が実現する)

謙三さんは、農地改革をはじめ、さまざまな問題に取り組んだ政治家でした。



刀利ダムのほとりに建てられた謙三さんの胸像。

強まる国交回復への願い

当時、日本はアメリカと結びつきを強め、台湾との関係を大切にしていました。ところが中国は、台湾と対立していたため、このような日本の態度に激しく反発していたのです。

それに、中国はかつて日本に侵略されたことがあるので、人々はなかなか謙三さんの言うことを信じようとはしませんでした。

謙三さんは、中国の指導者たちと激しい議論を何度も繰り返しました。

話し合いを重ねるうちに、中国の指導者たちは、謙三さんは信用できる相手であると認めるようになっていきました。謙三さんの日中国交回復にける願いも、ますます強くなっていきました。

もう70代も後半に入った私にとって、政治家としてこれが最後の大きな仕事になるだろう。なんとしても成功させねば…。

日本と中国が心から分かり合える日が来ることを信じて、謙三さんは、二度目の中国訪問を決心しました。

「まず、貿易を行いましょ。そして、だんだん日中両国のつながりを広げていくのです」

謙三さんの熱意あふれる説得とねばりに、中国の周恩来首相や陳毅副首相の心が動きました。

「分かりました。あなたを信じましょ」

ついに、謙三さんの真心が通じたのです。中国政府はようやく心を開き、大きな期待をもって、歩み寄ってくれたのでした。

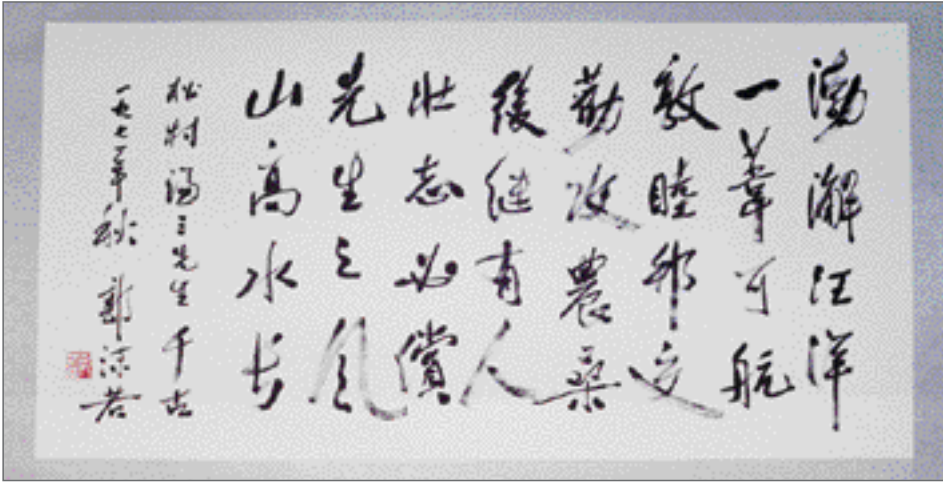
苦悩の日々

謙三さんが、やっとの思いで中国とのパイプをつないだと思っていたところ。



1959年、初めて中国を訪問し、周恩来首相(左)や陳毅副首相(右)と会談する謙三さん(中央)。





中日友好協会名誉会長の郭沫若さんは、謙三さんの死を悲しみ、次のような詩を捧げました。
 「渤海(中国の東のほうの海)は、広々としているが、小さな小舟でも渡ることができる。松村先生は、中日の友好や、農業政策などに尽くされた。先生の遺志を継ぐ人は必ず現れ、先生の志はきっと報われるだろう。先生の人からは、山のようには高く、水のようには清らかである」
 (訳文:「立山を仰いで」より)

日本政府は、謙三さんの思いとは、まったく逆の方向に進み始めました。アメリカと協調して、はっきり中国を敵だと思わずような態度をとり出したのです。

もともと、日本政府の中には、謙三さんの中国訪問に反対する人が多くいました。謙三さんを批判したり、嫌がらせをしたりする人もいたくらいです。それでも、謙三さんは自分の信念を曲げず、中国とのつながりを深めようと努力していたのです。

しかし、いくつもの輸出の約束が、どんどん取り消されていきました。少しずつ盛り上がっていた日中友好ムードも、一転して冷えてしまいました。

このままではいけない。何とかしなくては！
 謙三さんは自分の命もかえりみず、中国を訪問し、国交回復を訴え続けました。

しかし、中国の日本政府を非難する声は、以前よりもっと厳しく鋭いものでした。中には、日本の首相に対して悪口を言う人もいました。

その悪口を聞いたとき、謙三さんは、はっきりとこう言いました。
 「日本人の私の前で、日本の首相を非難することは断じて許しません」

周恩来首相をはじめ、その場にいた中国の人々は、はっと息をのみました。

中国に敬意をもちながら、同時に言うべきことはきちんと主張し、堂々とした態度で接する謙三さんの様子に、信用のできる人物だということが改めて分かったのです。

謙三さんと周首相の間には、いつしか、お互いへの尊敬と信頼が芽生えていました。

謙三さんが取り組んだ問題

謙三さんは、日中国交回復以外にも、政治家としてさまざまな問題に取り組みました。

農地改革 農村のしくみを変える取り組み

謙三さんは、農林大臣として、農村を近代的にするために、反対する地主たちを説得して農地改革を行いました。



地主たちにつめ寄られながらも、謙三さんは農地改革をおし進めました。
 (福光町立福光東部小学校 6年 山村友乃さん)



刀利ダムの建設
 小矢部川の下流地域では、水が不足したときに人々の間で争いが起きたり、逆に洪水で困ったりするなど、さまざまな問題がありました。

その問題を解決するために、謙三さんは、水量調節や発電の機能をもった多目的ダムの建設に取り組みました。



謙三さんのエピソード：謙三さんは、さまざまな仕事に取り組みましたが、そのお礼にお金を届ける人があり、「気持ちだけでいいんだ。余計な物はもうわけにはいかない」とその場で返したそうです。



謙三さんはランの花が好きで、よく世話をしていました。

日本と中国の国交回復を記念して、中国からパンダのカンカンとランランが贈られたんだって、お母さんに聞いたわ。



日本と中国のかけ橋

「生きて帰れんかもしれんな」

87歳になった謙三さんは、かなり体が弱っていました。それでも謙三さんは、5度目の中国訪問に立ちました。

中国と日本のきずなは、今はまだ細く弱い。しかし、絶対にこのきずなを断つてはいけません。

謙三さんの名前は、今や、中国の一般の人々にも広く知られていました。謙三さんに会った人たちは、口々に、

「古い友人として、最も尊敬し、信頼できる人だ」

「なんと立派な人だろっ」と

と、親しみをこめた笑顔で迎えました。

中国から帰ってきた後、謙三さんの体はめっきり弱ってしまいました。そして、ついに、家族や友人に見守られながら、静かに一生を終えました。

日本でも中国でも、多くの人々が謙三さんの死を悲しみました。

「松村死すとも、日中永遠和解の灯は消さじ」

日本の国民は改めて、日中の国交回復について考えました。

そして、謙三さんが亡くなった次の年、ついに日本の首相が中国を訪問したのです。謙三さんが長年願っていた日中国交回復が、ようやく実現したのでした。



1983年、福光町と中国の紹興市は、友好市町になり、記念碑が建てられました。

紹興市は、謙三さんと親交のあった、中国の周恩来首相ゆかりの市なんだって。



福光町立福光東部小学校6年の片岸来夢さん(左)と得能裕子さん(右)が、謙三さんの孫にあたる松村明雄さんから、お話を聞きました。

人の心と心が結ばれるきっかけができれば、その後は絶えず親交を温めていくことが大切です。次のページは、日本海側の玄関口である伏木港を近代化させた藤井能三さんのお話です。